○ ワークショップ「ドイツにおける経済倫理学とビジネスエシックス」

開催責任者　外国語学部　　加藤泰史

2008 年 9 月 5 日～7 日

南山大学名古屋キャンパス J 棟特別合同研究室

ワークショップは 3 日間にわたり、「ドイツにおける経済倫理学とビジネスエシックス」のテーマのもと、参加者 30 名、以下のとおり開催された。

◇報告者及び題目

Peter Koslowski (Vrije Universiteit Amsterdam)
"The Purpose of Business and the Future of Society"

Andreas Riessland (Nanzan University)
"Automobil und Nation in der Werbung"

Akihiko Iwahara (Denso Corporation)
"DENSO Group Efforts in CSR"

Albert Löhr, (Internationales Hochschulinstitut Zittau)
"Würde in der Unternehmensethik

Gerd Rainer Wagner (Heinrich-Heine-Universität Düsseldorf),
"Die Würde der Ärmsten als Unternehmensverpflichtung"

Matthias Kettner (Universität Witten/Herdecke)
"Zwei philosophische Paradigmen der Wirtschaftsethik in Deutschland"

Carolina Grünschloß (Henkel Japan)
"The CSR boom in Japan as an opportunity for Western corporations to gain competitive advantages"

Shingo Shimada (Heinrich-Heine-Universität Düsseldorf),
"Die Würde des Menschen in Unternehmen―aus der Perspektive der kulturvergleichenden Soziologie"

◇ワークショップの討論内容

報告者の顔ぶれは、哲学者・社会学者・経営学者・企業人と多彩で、全体としてまさに多様な観点からの議論が繰り広げられたと言える。現実に企業が行っている活動から企業が道徳的主体であるべき必然性を説いた議論、またＣＳＲ担当の立場から、かたや企業が現実に道徳的主体であることをしめした議論、かたや戦略的側面を強調した議論、企業の広

告の中にその人間観を探ろうとした議論、人間の尊厳を企画能力に見出すことによって企業活動と人間の尊厳の間に接点を見出そうとする議論、ポストモダン的な観点から会社の「目的」を前面に押し出しその限界内で人間尊厳を考えようとする議論、討議（コミュニケーション）倫理学の観点からドイツの企業倫理の現状とその問題点を明らかにした議論、比較社会学の観点から尊厳概念の普遍性と特殊性を顧慮した研究をするべきだと指摘した議論――しかし、その多様性の中にあって討論において、（１）ＣＳＲ（企業の社会的責任）と（２）「人間の尊厳」という問題意識が共有されていたことは明らかであった。つまり、どの報告も直接的にであれ間接的にであれ、現代社会における企業の経済活動と尊厳ある人間の生き方の関わりを考えさせる意義深いものであった。もちろん各報告に対する個別の質疑応答は多岐にわたった。参加者の立場の違いを反映して、それぞれの報告に対して、時に根本的とも言える質問と応答の応酬があったが、それらは、“はたして企業は人間の尊厳を尊重しうる道徳的主体たりうるのか”という問題に収斂していくものであることがあぶり出されたのが一つの成果だったと言えよう。企業が道徳的主体に「ならなければならない」としても本当に「なりうる」のか、どうすれば可能なのか、そのことと企業の目的はコンフリクトを起こさないのか。おそらく、哲学的視点がなければ、その美名に隠されて問題にされることさえなく通り過ぎていかれるだけだったであろうＣＳＲに、多角的にアプローチしてその基本的問題点を明るみに出すことができたといってよいであろう。

◇研究成果発表

未定